

絵でよみがえる、瀧神社と龍頭が滝の風景（その2：森為泰の歌の本から）

森為泰（もり・ためひろ）が書いた、『石見国松川小林両家へ送る歌』の紹介を続けます。

前回は、邑智郡中野の小林四郎雅氏から絵をもらったので、為泰は、そのお礼にしようと、画家である陶山勝寂（すやま・しょうじゃく）に、龍頭が滝を写させ、その絵に、賛（さん）を入れたこと。また、この絵とは別に、邑智郡の18人の人々が、和歌を詠むというので、もう2枚、龍頭が滝の絵を作成しようと思っていた、ということを紹介しました。

さて、その小林四郎雅氏ですが、72才で亡くなってしまいました。その知らせが、邑智郡矢上から、為泰のもとに届きました。そこで、為泰は、この2枚の絵を作成し、自分が、龍頭が滝を見に行ったときに詠んだ、2首の和歌を添えて送りました。その2首とは、「常磐に 千年の幸を 松笠の岩ねのしたで 落る瀧の瀬」「幾ばくの 玉がつらぬき みだるらむ たつのかしらの 瀧のしら糸」というものです。「常磐（じょうけい）」というのは、亡くなった雅氏のことでしょうか。2首目の、「たつのかしら」とは、漢字で書くと、「龍の頭」ということですから、龍頭が滝を指すのでしょうか。少し、ひねってますね。

また、邑智郡の18人は、この絵を見ながら、和歌の歌会を催したようです。18首の和歌と名前も、書き添えられています。たとえば、「出（いず）る日の かがやくまに 虹立て あやしく落る 松笠のたき 繁樹」「水上は 天の川原の 雲井より あまぎりおつる まつ笠の瀧 正奥」という和歌が見えます。まるで、実物を見てきたような、驚くべき想像力です。このようなことが、この『石見国松川小林両家へ送る歌』には、書かれています。



さて、『石見国松川小林両家へ送る歌』の末尾に、左のような、龍頭が滝の絵が添えられています。為泰は、龍頭が滝を見に行ったことがありますから、この絵は、龍頭が滝の風景を、為泰が、見たままに描いたものだと思います。

まず、向かって左側に、階段と鳥居、それから建物が描かれています。この建物は、瀧神社のお社（やしろ）だと思います。

次に、右側を見ると、ここにも建物が描かれています。建物の敷地は、整地もされているようです。この建物ですが、瀧神社の拝殿だと思います。瀧神社の祭祀は、龍頭が滝を眺めながら、ここで行われたのでしょうか。瀧神社では、場を清めるために、湯立神事が行われていたことを、以前、紹介しましたが、その湯立神事は、この拝殿で行われていたのではないのでしょうか。

また、滝を下る流水は、2筋で描かれています。現在は、あまり話題にされることはありませんが、昔の人々は、龍頭が滝の流水が、途中で2筋に別れることを、愛（め）でていたのかもしれない。

（次回に続く。）